

機関番号：82609

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20591427

研究課題名（和文）性差の観点から見た薬物依存症の社会精神医学的研究

研究課題名（英文）The gender difference among drug users

研究代表者

妹尾 栄一（SEN00 EIICHI）

財団法人東京都医学研究機構・東京都精神医学総合研究所・副参事研究員

研究者番号：30226675

研究成果の概要（和文）：成人男性における妥当性が確立された診断基準といえども、女性群にまったく同様に適用するにあたっては慎重さが求められる。また依存症者に特異的な所見が男女同列に扱えるかどうか、今回の検討課題の一つである。本研究では様々な対象手段で、性差の観点からの特徴を究明し、合わせて先行研究も参照しつつ、はたして女性の依存症者にもっともふさわしい治療システムはいかにあるべきか、今後の検討課題を整理した。

研究成果の概要（英文）：

Even the validity of diagnostic criteria have been established in adult men, the validity of applying the female group is required to be cautious. What is the most suitable treatment system to women drug abuser ? We discussed this issue.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：内科系臨床医学・精神神経科学

キーワード：女性、男性、性差、薬物依存、薬物乱用

1. 研究開始当初の背景

女性の薬物乱用を診断するにあたって、最大の困難は男性向けの診断基準をストレートに適用することの妥当性の問題である。かつての DSM-III の診断基準では、依存の身体的徴候が重視されていたが、一般に女性では身体依存徴候の出現の頻度は早く、男性とどう列に適応出来るのことは希である。診断基準が男性と女性の、双方には妥当しない原因はいくつかある。例えば、飲酒の常習化の頻度は男性よりも女性に置いて急速とされ、身体合併症や退薬症状など、急性で重篤な症状が出現するとされる。

2. 研究の目的

この様に成人男性における妥当性が確立された診断基準といえども、女性群にまったく同様に適用するにあたっては慎重さが求められる。また依存症者に特異的な所見が男女同列に扱えるかどうか、今回の検討課題の一つである。本研究では様々な対象手段で、性差の観点からの特徴を究明し、合わせて先行研究も参照しつつ、はたして女性の依存症者にもっともふさわしい治療システムはいかにあるべきか、今後の検討課題を整理した。

3. 研究の方法

児童自立支援施設、臨床精神科病院の2群で、男女差をひっかうしつつ主として女性に固有の特徴を比較検討した。3年間の研究成果と内外の知見を参照して以下のようにまとめた。

4. 研究成果

(1) 疫学研究成果

いくつかの疫学的な調査で、薬物の乱用と女性への虐待の間に密接で重要な関連性があると認められているが、薬物が親密な関係性での暴力行為へのリスクの一つであるとしても、それが単独で鍵となる役割を果たしているわけではないと強調される。薬物の単独因子ではなく、それと関連した他の要因と結合することで、女性への虐待に発展しやすいことが近年理解されている。そうした要因とは、「加害者が暴力的で物質が乱用されている源家族で生育していること」「学歴や収入が低いこと」「女性への暴力が時には受容されると加害者が信じていること」「アルコールや薬物の乱用が暴力を増加させると加害者が信じている場合」「個人的なパワーを増やしたいとの欲求」などである。

Violence Against Women Online Resourcesで公表している論考によると、物資乱用を女性に対する虐待の文脈で以下に類型化している。

①言い訳；多くの社会でアルコールや薬物の酩酊下（影響下）に行った行為は責任を減免してとらえられる傾向があり、本人自身よりも薬物のせいで逸脱行為が誘発されたと解釈される。

②認知機能の攪乱要因；薬物によって個体の認識力、統合機能、情報処理機能に影響が及び、暴力へのリスクを増加させる。

③権力への動機付け；物質への乱用も女性への虐待も、ともに個人が権力や支配を達成するための欲求に、共通の起源があるとの説。

④状況要因；薬物摂取や薬物の購入、密売などの薬物を巡る状況要因と暴力とが関連しているとの仮説。あるいはいつどこで誰と薬物を摂取するかという葛藤が、男性と女性のパートナー間で生じることは決して珍しくない。

⑤化学物質としての作用；薬物自体の持つ中枢神経系への作用。依存症の形成も含まれる。

(2) 男女間の動態の比較

全人口を母数とすると、薬物乱用の比率は当然男性側に多い。これは治療に結びついた患者の数でも男性が多いことから妥当であ

る。しかし、男女のべつに乱用者を母数にすると、女性の方がより若年で薬物乱用を始め、かつ女性の方が治療に結びつく頻度が高いことも判明している。また受診経路も対照的で、女性の方が刑事司法システムとの連携が少ない反面、自分自身の判断で治療に結びついている割合が高い。換言すれば、男性は逮捕、刑務所受刑などの司法システムとの関わりがより多く、受刑を終えた後に治療に結びつく比率も高い。

そのほか女性の対象者により特記すべき点として、子どもにとっての「親」の属性をより多く有しており、これは単に結婚歴や子どもをもうけたという外形的な事実だけではなく、同じ家で子どもと同居しつつ、薬物使用も並行している事実を示唆する。換言すれば、男性は子どもをもうけたとしても、実際の育児はパートナーに任せている比率が高い。こうした事実は、女性の薬物乱用者を治療するに当たり、単に薬物依存からの脱却を指導するだけではなく、子どもとの関わり、あるいは育児機能をサポートする様な補助的な治療ユニットを備えていることが望ましい。

親業支援と密接に関わるのは、女性の薬物乱用者治療に際して、養育されている子どもの視点、子どもの安全性、子どもの愛着対象などを同時に重視しなければならないこと、また子どもの安全英を確保する上では、児童相談所などの福祉機関との連携も不可欠の要素となる。

(3) 家族環境と性差の影響

社会的学習理論に立脚した研究が繰り返すように、反社会的な親を持つ場合に子供の反社会的行動のリスクは高く、数多くの攻撃的な子供が少なくとも片方の親が極端に攻撃的な家庭に育っていることなど世代間での類似性を認める。親がアルコール症で犯罪歴等がある場合、その子供が行為障害を呈する危険性が顕著に上昇する。これらの知見は、社会的学習理論のパラダイムと一致しており、家族構成員間の攻撃行動が攻撃性のモデルを提供しやすい。攻撃行動が男性的な行為であると見なされるような数多くの機会があふれており、同性によって演じられるお手本をより模倣しやすいという原理から考えても、特に男児にとっては女児よりも社会化の効果がより強烈である。また、同様のモデルに接する機会があった場合、男児の方が一貫して攻撃性を示している。

もう一つ見逃せない点として、仮に同程度のストレスに暴露されたとしても、それが攻撃性や行為障害として顕現するための情報認知過程に男女間の相違を認める。ほぼ定説化しているのは、両親の葛藤によって生じた情緒的不安定さを、男児は外部からの脅威感

として把握することが多く、外部への適応上の問題へと発展しやすい。これに対して女兒の場合には、自己批判の感情に傾きやすく、内面的な問題へと発展しやすい。

男児の社会的相互作用を処理するにあたって、より攻撃的に発現していきやすいもう一つの原因として、男性の方が身体的虐待や早期に残酷なしつけを行った結果として攻撃性が増長されたとの見解がある。

もう一つ別の観点として、「性別役割 (gender role)」の相違から検討するアプローチもある。即ち、女性では攻撃性をストレスの集積により、自己コントロールを喪失した結果として把握しやすい。そのため、女性にとっては本来あるべき標準よりも逸脱した、失敗体験として捉えてしまい、否定的に見なしている。対照的に男性では、攻撃性を自尊感情に挑戦を仕掛けて他者をコントロールするパワーの延長上に捉えており、その意味で肯定的に捉えている。この仮説に則れば、ジェンダー (性差) によって社会的情報過程と行動の間が調整されると見なされ、とりわけ女性では人間関係に関連づけられた認知過程を通じて行われ (具体的には親社会的ないし協調的で)、一方男性ではより手段に関連づけた認知過程が特徴的である。

(4) 児童期の被虐待経験、心的外傷と薬物乱用

児童虐待の問題が精神保健福祉とその関連領域で、強い関心を喚起している。本稿との関連では児童期の性的虐待 (以後 CSA) がアルコール薬物乱用と密接な関係があることが、多数の研究成果によって確認されている。代表的な研究として、Stein, J. A. ら (43) はロサンゼルス地区一般人口を対象に構造化面接を採用して実施した精神障害疫学調査において、アルコール乱用依存の発生率が児童虐待群で 26. 2% に対し非虐待群では 5. 5% と前者でより高頻度に薬物乱用依存が発生しており、同様に薬物乱用依存に関しても、児童虐待群で 36. 6% に対し非虐待群では 16. 5% と、前者により高頻度の発生を認めている。Roesler, T. A. ら (38) は 44 名の CSA 患者を対象として、薬物乱用/依存群と非乱用群とに分類し、各種心理状態や構造化精神科診断面接を行った。調査にあたっての問題意識として、1) CSA 体験のある患者の一部が薬物を乱用し、その他は乱用しないのはなぜか、2) 薬物を乱用する CSA 体験者は成人に達してから別の人格パターンや症状を発展させるのか、を列挙している。

①に関して述べるならば、薬物乱用/依存群では対照群と比較して、より重度の機能不全家族で育っている。傍証として、薬物乱用/依存と親からの暴力、育児放棄、性的虐待

などとの相関が、親からの spanking (平手打ち) などと同様に有意に高く、薬物乱用/依存に陥った患者たちが、より重度の機能不全家族の環境下で生育した可能性を示唆する。また別の知見では放置されたり殴打された、より重度の性的虐待を受けた子どもが薬物を乱用しやすいとされる。もう一つの視点として、薬物乱用/依存患者は、性的虐待等の既往とは関係なく、人格障害が基底にあり、虐待の既往がなかったとしても乱用に走ったであろうとの仮説である。

②に関しては、ほとんどの測定項目で両群間の有意差は認めなかった。Roesler は、心的外傷の生存者の物質使用は、基本的には情況反動的であるとみなしている。即ち彼らの有害な原因状況 (近親姦やその成り行きとしての PTSD (心的外傷後ストレス障害)) が、十分に長期にわたって積み重なったため、結果として生理学的な変調をもたらし、ひいては「使用」「乱用」「依存」といった帰結に至ったと解釈している。近似し

ユニークな仮説として、CSA の生存者はアルコールや薬物を「嫌悪的感情や記憶、状況に対する慢性的な対処反応の意味で、化学的に惹起された乖離状態を達成するために」使用すると提唱している。この仮説に基づくならば、情況要因が変化して一連の対処反応を起す必要がなくなる、あるいは対処行動 (coping mechanism) が他の方法へと置き換えれば、化学的に惹起された乖離も収束し、ひいては乱用依存状態も解消するはずである。この仮説は「進行性」や「非可逆性」を強調する伝統的な嗜癖治療モデルではなく、薬物の使用は二次的な対処行動として把握すべきであるとの概念を支持しており、その視点は幼児期の性的虐待の外傷理論と合致して、PTSD の帰結を究極的には可逆的で治療可能なものと見なしている。

同様の視点から、Root, M. (39) もまた、CSA の生存者たちは対処行動として薬物を使用していると提唱している。それゆえ、外傷に関連した記憶、感情、認知などへ立ち向かうための対処行動が他の方法へと代替されない限り、薬物使用も中断できないことになる。彼女はこの立場を敷衍して、他の立場から見ると治療上の失敗と見なされる特定の患者に関して、治療導入期から直ちに断薬を求めるのは困難である、と考察している。

Peterson, L. ら (34) は、薬物を乱用している母親はこれまで研究の領域でも治療の領域でも、ずっと無視され続けた対象であり、なおかつ彼女たちは児童虐待や放置を起す危険性を有していると指摘する。Peterson らの問題意識として、児童虐待関連の研究では初期の頃から「アルコール薬物の乱用」がハイリスク因子であることが、繰り返し追試され続けてきたにもかかわらず、薬物乱用者

を調査の対象として児童虐待の発生頻度やリスク要因を検討した実証的な研究が数えるほどしかない点や、薬物を乱用している母親を治療するに当たって、「子どもの虐待防止が本質的に重要な構成要素となる」ことが、ほとんど希にしか言及されない点を批判している。

嗜癮問題の治療プログラムやスタッフ間に、児童虐待の問題が顧慮されない背景を Peterson らは次のように論じている。

1) ほぼ例外なく、嗜癮問題の治療機関は子どもを同伴しての入所を受け入れない。一部例外的に子どもとの同伴入所を認めた機関では、母親である患者にとって子どもへの関心が嗜癮治療の最大の動機付けになっていた。子どもへの虐待が観察される事例に対しては、嗜癮問題の治療機関で行われているような「説教的な」アプローチ単独では親機能の修正まで踏み込んだ効果は上がらない。また、患者の特異的な感情や認知の修正をもたらす技能獲得 (skill acquisition) を重視した認知行動学的な志向性は、伝統的嗜癮治療機関にとっては患者本位と見なされない。

2) スタッフ自体の子育てに対する認識が、「厳格なしつけ」といった旧来の観念にとらわれていること。母親にとって理想的な子育てのスキルを得るために「遊び」の持つ重要性をスタッフが受容していない。また嗜癮問題の治療スタッフが子どもたちとほとんど交流していない現状では、臨床児童心理を中心に知見を積み重ねてきた児童虐待へのアプローチが重要視される蓋然性は低い。

Peterson らの考察を、単に北米圏での特殊な治療風土の分析と軽視すべきではない。こうした提言を傾聴し、児童虐待に関連した文献を広範に検討し、さらに薬物乱用の治療に関する研究成果とも合致する治療モデルが希求されるべきである。

1980 年代に実施された全米規模の臨床的評価研究 (The Nation Clinical Evaluation Study) の結果から見ても、「児童を放置している」と見なされた下位集団の半数以上、身体的虐待の傾向を示した家族の大半に、薬物乱用の実態が確認されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 15 件)

- ① 林 宜亨, 妹尾 栄一, 梅野 充, 合川 勇三, 増田 尚久, 西村 隆夫: パソコン用エアダスター吸入による代替フロンガス (HFC152a) 依存症の一例. 精神科治療学 25(12)1679-1685, 2010. 査読あり

- ② 妹尾 栄一 (9 人中 4 番目): 欧米の薬物乱用政策 日本との比較を中心に. 公衆衛生 73(11)818-820, 2009. 査読あり

- ③ 梅野 充, 森田 展彰, 妹尾 栄一: 薬物依存回復施設から見た薬物乱用と心的外傷との関連 日本アルコール薬物医学会雑誌 44(6)623-635, 2009. 査読あり

- ④ 平井 慎二, 佐竹 暁, 竹村 道夫, 岩波 明, 妹尾 栄一, 西村 直之: デザイナードラッグ. 精神科 13(1)29-33. 2008. 査読なし

[学会発表] (計 1 件)

- ① 原口 彩子, 妹尾 栄一ほか 嗜癮重症度指標の応用 日本アルコール薬物医学会 2010 年 9 月 25 日 名古屋 (愛知県)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

妹尾 栄一 (SEN00 EIICHI)
財団法人東京都医学研究機構・東京都精神医学総合研究所・副参事研究員
研究者番号: 30226675

(2) 研究分担者

大原 美知子 (OHARA MICHIKO)
財団法人東京都医学研究機構・東京都精神医学総合研究所・研究員
研究者番号: 50360699